

人権啓発標語

「伝えよう 勇気をだして その言葉」

菊陽北小学校 6年 富田 二瑚

今年の夏、九州全域に線状降水帯が発生し、僕の祖父母は被災の家が床上浸水した。電話で駆けつけた母は、祖父母の家へ向かう道の途中で父は「命があつただけでもあれば、僕たち家族は祖父母の家に片付けた。水が引いた後、すぐ丈夫?」と祖父母の家を見に行つた。我が家は片付けてくれたと聞いた。猛暑の中、たくさんの人が祖父母を助けてくれた。この状況でも孤立せずに支え合える人たちの温かさを感じた。また、自分の家も被害に遭ったと聞いた。電気屋さん、大工さん、親戚など、たくさんの人が祖父母を助けてくれた。この温かさを感じた。この学級でも友達とのつながりを大切に過ごしていきました。



支えあう力を高めていきたい

先生から

あつているのに、地域に住む人のために動く姿は本当にすごいと思った。人々が助け合って生きていくからこそ、人は困難を乗り越え、希望を持つて生きていけると感じた。

僕は祖父と一緒に災害ごみを運び出す作業をした。災害ごみを受ける人、運動場に行く人など、説明をする人、交通整理をする人、ボランティアの人などが汗を流しながら労働していた。祖父を見かけたが、理を理解する人が、一大変でしたね。よ」と声をかけ、トラックからごみを運び出す手伝いをしてくれた。その時の祖父の笑顔が心にずっと残っている。僕の祖父母の家は被災が少ないので、同じ地域には片付けてくれた。その日の祖父の笑顔が終わっていない家がたくさんあった。日がたつにつれ、住宅や田畠、道路の被害